

小田実全集（評論 第28巻）

私の文学—「^{ロゴス}文」の対話



講談社
小田実全集
Makoto Oda

目次

「ロゴス」
「文」篇

1 三人の「死顔」——野間宏・中村真一郎・堀田善衛

2 責任と自由——「書き碎く」こととしての「戦後文学」

「対話」篇

1 武田泰淳・埴谷雄高との鼎談（一九七五年）「革命と文学」

2 大岡昇平との対話（一九七九年）「一兵卒の視点から」

3 中上健次との対話（一九八九年）「日本文学の枠を超えて」

4 埴谷雄高・中村真一郎・佐々木基一・小田切秀雄との座談会（一九九一年）

「戦後から未来へ」

5 小島信夫との対話（一九九六年）「長篇小説について」

6 安岡章太郎との対話（一九九七年）「御破算後の人間・文学」

7 ドナルド・キーンとの対話（一九九八年）「崇高にしておどましき戦争」

あとがき——「ロゴス」の「文学」

私の文学——「ロゴス文」の対話

「^ロ文_ゴ」
篇

1 三人の「死顔」——野間宏・中村真一郎・堀田善衛

私は最近、私が長年親しくしていた三人の作家の死に出会い、告別式で三人それぞれの「死顔」に
対面し、別れを告げている。三人は、まず、野間宏、ついで、中村真一郎、そして、堀田善衛。

野間が亡くなったのは一九九一年一月だったから、最近と言ってもかなり遠いが、中村が急死した
のは一九九七年十二月、堀田の死は一九九八年九月。ごく最近の矢つぎ早の死だ。最近の私の知己の
作家の死としてはほかに中村が亡くなった一九九七年二月の埴谷雄高の死があるが、彼の世界は三人
の世界よりも私の世界から少し遠かったし、「死顔」にも対面していない。

三人とも長年親しくしていたと言っても、私はべつに三人の弟子であつたわけではない。もちろん、
三人とも夢にもそう思っていなかつただろう。三人のうちで個人的にもっとも親しかつたのは、少年
時代からつきあひのあつた中村真一郎だが（私が『死の影の下に』を大阪の焼跡で読んで、奇妙に感
動して「ファン・レター」を書いた。それ以来のつきあひだ。このつきあひについては、「新潮」の
九八年三月号の中村に対する追悼文で書いている。『デモクラット』にして『arbieter elegantiae』
の死。』ひとりでもやる、ひとりでもやめる』〔筑摩書房・二〇〇〇年〕所収）、私の文学作品は中村の
ものとは大きくちがつていて、このつきあひはまさに彼が言っていた通り、終始彼と彼の年少の友人
とのつきあひだ。私から言えば、私と私の年長の友人、そして、私流の言い方をすれば私の文学の「先達」

とのつきあいだ。中村の紹介で、私は野間、堀田の両氏を若いときから知っていたが、親しくつきあうようになったのは、私がつと長じてからのことで、彼らも彼らで年をとり、それまでに積み上げた成果を越えて次の時代に入ろうとしていたところだ。野間の場合で言えば、『青年の環』のあと何年か経ち、すべてをやりなおすようにして、分子生物学から鶴屋南北、世阿弥からオゾン層の破壊に至る全体小説ならぬ「全体読書」あるいは「全体勉強」をやりながら未完の大作『生々死々』（講談社）を長年書きつづけていたところで、私は私でこれは幸い完成することができた『ベトナムから遠く離れて』（講談社・一九九二年）をこれも長年書いて来ていた。二人はこのいつ終るとも知れぬはてのないう大作を同じ雑誌に連載していたので、「おたがい励まし合つて長く書いているのですか」と編集者に私は言われたことがある。野間は私よりはるかにえらかったのでそんなことばは聞かずにすんだらしいが。

堀田はそのころもうスペインに住んでいたかと思うが、堀田とのじかのつきあいは、それより数年前から堀田がその創始のときから形成、維持に努力して来た「アジア・アフリカ作家会議」を通じてのつきあいだったが、それよりさらに以前には、これは私のほうから強引に押しつけたつきあいだったかも知れないが、こちらのほうは私が形成、維持に努力して来ていたベトナム反戦運動のなかで、彼の逗子の居宅にアメリカ合州国軍のベトナム前線からの脱走兵のひとりを押しつけかかまってもらったというつきあいがあつた。告別式で彼の「死顔」に対しながら、ふと思いがあつたのは、それが彼の居宅訪問の二度目のときで、一度目はまさに脱走兵を押しつけに行った、そのあたりであつたことだ。

しかし、私が彼ら三人に長年親しくしていたのは、いや、これは私が勝手に言うことだから、私が三人に長年親しい気持をもって来たのと言うべきことだが、ものごとの基本のところ、こうしたつきあいを通じてのことではなかったと思う。基本のところにあつたのは、三人の文学だった。私をひきつけ、親しい気持にさせたのは、彼らの「文学」が私が書く、あるいは、書こうとする「文学」とあい通じるものを多くもっていたからだ。

私は彼らの研究家でないので、三人の作品を丹念に読んで来たわけではないし、すべて読んでいたのでもない。三人の作品のなかにもいくらでもいただきかねるものもあつた。しかし、彼らが達成して来たこと、いや、それ以上にこれから達成をめざして動くその方向——自分自身の「文学」をつくり出そうとする私をひきつけたのはそこだった。いや、あえて言えば、前者より後者だと、若者は生来、生ま意気なものである、自分の「文学」を書き出したときの私はそう考えていた。

その気持は、そのときの私より年をとって少しはケンキヨになつたとはいえ、基本的にかかわらずある。彼らの「文学」の達成よりその未来への方向——そこに強くひかれる私は変らずある。だからこそ、私は野間の未完の『生々死々』や中村のこれもまた未完の『老木に花の』(集英社)という二小説作品、あるいは、堀田が書きつづけて来た、そして、生きていればさらに書きつづけて行つたにちがいない『空の空なればこそ』(筑摩書房)のエッセイに表わされた識見のひろがりや深さに心ひかれるのだ。

ひと口に言えば、彼ら三人は、私にとって私が書く、書こうとする「文学」の「先達」だった。私には「先輩」ということばは、何かしら上級生が下級生をしごく運動部的、階級社会的ひびきがあつ

てコンリンザイいやなことばだが、「先達」にはその種の抵抗感はない。同じ方向へむかって歩く「同行者」の感じがある。ただ、「先達」のほうが少し先を行っている。そして、「先達」は今や姿を消し、私ひとりが歩いている。その感じがある。いつしよに誰か歩いているのか、いや、あとに誰か歩いて来ているのか。――

この三人の「先達」の文学は、まとめ上げて言うなら「戦後文学」だ。三人の「文学」はそれぞれにちがう。それをまず認めておいて言うことだが、いや、言うべきだが、それにもかかわらず、三人の「文学」は共通の根をもっていて、それが「戦後文学」という根だ。この共通の根をもち、そこでひとつのつながりを「戦後文学」というかたちでつくり上げている作家は他に何人もいる。もちろん、埴谷雄高、さらには、武田泰淳、椎名麟三、あるいは、梅崎春生。この「戦後文学」のなかには、私の認識では『触手』というポルノグラフィの世界最高の傑作を書いた小田仁二郎も入るのだが、今、現在のこの世界にあつて、私が今はあらかた亡くなってしまった「戦後文学」の作家たちのなかでもっとも親しい気持をもつと同時に、私にとっても重要だと考えるのは、野間、中村、堀田の三人だ。ただ、ここでも私はこれまで述べて来たことと同じことを言っておきたい。私が親しい気持をもつとともに重要だと考えるのは、彼らのこれまでの達成のなかには卓抜した作品も多くあるが、しかし、その達成よりも、今、現在のこの世界において彼らが「先達」として歩こうとしていた方向においてのことだ。

私は「新潮」九八年八月号に書いた文学論『被災地』『ロンギノス』『戦後文学』（「ロンギノス」との共著、『崇高について』河合文化教育研究所・一九九九年所収）のなかで「戦後文学」について少しば

かり論じている。そこに書いたことと少し重複するが、「戦後文学」は、まず、「全体」に対そうとした「文学」であつたことだ。「戦後文学」の作家たちが生まれ育つて日本の敗戦にまで至る時代は、その果てには巨大な戦争に至る狂暴な「全体」が彼らの上に覆いかぶさり、彼らをその強大な力で押しつぶしにかかつて来た時代だ。平和な時代なら、人は「全体」と無関係に生きて行くことができる、あるいは、そう錯覚することが安泰にできる。しかし、彼らの時代はその安泰を彼らが急速に喪失して行く時代だつた。そのあげくの果てに戦争が来た。それは彼らひとりひとりが戦場に駆り出されて行くときが来たことだ。彼らはそのかたちでひとりひとりが「全体」の狂暴に対した。その力に自らをさらし、ホンロウされた。

この「全体」が敗戦によつて崩壊したあと、「戦後文学」の作家たちがまずなそうとしたことは、その自分たちを押しつぶしにかかった「全体」に正面きつて対してその本質をみきわめることだつた。ただ、彼らは歴史家ではなかつたから、「全体」をただ包括的、全体的にとらえてそれのこと足れりとしたのではなかつた。彼ら自身をふくめて、押しつぶされかかつた人間、いや、同時に押しつぶしにかかつた人間の問題を通して、問題のヒダのなかに入つて「全体」の姿かたちを内部からみきわめようとした。もちろん、その企ての成果にはできふではあつた。しかし、大筋のところ、彼らの企ては成功していたように見える。それは、彼らの作品の多くが、同じように押しつぶされかかつた若者の心を大きくとらえたことがよく示している。まだ少年だつた私の心も大きくとらえた。大都市大阪のまんなかについて、ほとんど連日空襲を受けてそれこそ戦争という「全体」にいやでもスッポリと包み込まれて生きていた私は、そういう体験をもたなかつた同世代の人たちにくらべて、はるかに

彼らの作品、「戦後文学」が判つたにちがいない。わがものとも感じとることができた。

「全体」に対して、その本質をみきわめようとした彼らの企てで重要だったことは、彼らが「全体」をただ包括的、全体的にとらえてそれでこと足れりとしたのではなく、その下で押しつぶされかかった、あるいは、押しつぶしにかかった個々の人間の問題として、その個々の人間の問題のなかに入り込んで内部から「全体」の本質、姿かたちをみきわめようとしたことと同時に、逆に個々の人間の問題を「全体」と切り離すことなく「全体」の問題のなかで追究しようとしたことだ。この二つが、戦後数多く出た戦争の悲惨をそれぞれに描いた他の文学作品との根本的なちがいをかたちづくっていたように思う。だから、他の文学作品が駄目だと私は言っているのではない。なかには、いくつもすぐれた作品があつた。しかし、「全体」とのかかわりあいにおいて、ちがいは明瞭であり、根本的だつた。そして、もうひとつ、さらに重要なことが、「戦後文学」の作家たちにはあつた。それは、彼らが彼らを押しつぶしにかかった「過去」の「全体」に対しながら、「現在」、そして、さらには「未来」の「全体」とかかわりあわせるかたちでその正面きつた「過去」の「全体」との対面、いや、「対決」をしていた、すくなくとも、しようとしていたことだ。「過去」を書こうとすることで、歴史として完結した「歴史小説」を彼らは書こうとしているのではなかつた。今、現在、そして、これからの問題として「過去」を書こうとしていた。

「現在」、「未来」の「全体」とは、彼らが、あるいは、人びとが今、現在、生き、そして、これから生きて行こうとする「全体」だが、彼らは、彼ら自身の「過去」の体験によって、「全体」と無関係に個々

の人間は生きて行くことはできないことをいやおうなしの事実として体得していた。では、個々の人間である自分をそのなかにふくみ込んで、自分をその切り離しがたい一部とする新らしい「全体」を「過去」の「全体」の崩壊のあとにかたचितづくるか。それはその「全体」の一部であるゆえに自分の権利でもあれば責任でもある——そこまでの思考のひろがりを彼らの「過去」の「全体」に対する「対決」はもつていた。

それでは、新しくかたちづくる、かたちづくるべきこれからの「全体」はどのようなものとしてあるのか。それは、大きくまとめ上げて言えば、その狂暴の力によって人間が押しつぶされることのない、その狂暴の力に荷担して人間が押しつぶすことのない「全体」だった。「戦後文学」の作品は、また、作家はさまざまにちがっている。しかし、ひとつ共通したところがあつたとすれば、そうした「全体」を彼らが希求するものとしてもつていたことだ。そして、こうした「全体」の形成に自分がかかわることが自分の権利であるとともに責任だとするということは、そう自己認識することは、そこに倫理の問題が出て来ているということだろう。もちろん、個々の作品、作家のちがいはいくらでもある。しかし、それらの個々のちがいを越えて、ひとつたしかなこととして言えることは、「戦後文学」はその本質において倫理的な「文学」だったことだ。そこにおいて、倫理の問題はわが事に非ずとして来た日本文学の主流ともその伝統とも大いに切れていた。

誤解のないように述べておきたいが、私が三人の作家を中心にして「戦後文学」のことをこれまで書いて来たのは、ことさらに三人の作家の「文学」や「戦後文学」全体を賞揚して、昨今軽視される

どころか無視されて来ている三人の作家の作品をふくめて「戦後文学」全体を「復権」させる意図があったことではない、書いて来たのは、今、現在のこの世界が、日本のことであれ世界全体のことであれ、どんづまりに来ていて、大きくゆらぎ始めているように見えているからだ。戦後の日本、あるいは戦後の世界にあつて築き上げられて来た、そのなかに私自身をふくめて人びとが住み、生きる「全体」の構造がゆらぎ始めてもいれば、そこにしっかりとねじ込まれるとともに支えられて来た価値も崩れつつあつて、「全体」が今崩壊の様相を呈しつつある——これは、私自身をふくめて多くの人の眼に見えて来ていることだが、この「全体」にむきあいながら、では、どうするか。そう考えるとき、私には、かつて同じ問題を「過去」の「全体」に対して、いや、「対決」してあつた「戦後文学」が大きな示唆と力をあたえるものとして見えて来る。なかでもとりわけ今は亡き三人の作家が私にとつて親しい存在として見えて来るのは、かつての「過去」の「全体」にそれぞれ彼らの「文学」を通じて正面きつて対した彼ら三人が私同様、今、現在、崩壊の様相を呈しつつある「全体」にむきあつて、「では、どうするか」の設問に彼らの「文学」を通じて何んとか答を出そうと努力している、その懸命の努力が私に感じとられていたからだ。かつての「先達」だった彼らは、その努力を私も共有するがゆえに、私にとつての「同志」でもあつた。私はそう晩年の彼らを認識していた。

かつて「戦後文学」の作家たちが、それぞれに「過去」の「全体」に対しながら、新らしいあるべき「現在」「未来」の「全体」として、その狂暴の力によつて人間が押しつぶされることのない、人間が押しつぶすことのない「全体」を希求したことは先に述べた。こうした希求を人がもつとき、「戦

後文学」の作家であれ他の誰であれ、そのあるべき「全体」の指導原理として「マルクス主義」を措定するのはむしろありふれたことだ。「戦後文学」の「司会者」役だった、そう中村自身が書いていた植谷雄高によつて「芸術派」ともくされた中村真一郎も晩年になつて過去をふり返つて、『戦後派』の、ほとんど唯一の文学的主題として追求しつづけたのは、世界を壊滅させた大戦のなかでの、人間の生死の問題であり、不戦と直接に結びつく筈の共産主義の未来だった」と書いていた。しかし、その輝かしい「共産主義の未来」の具現体である、そのはずの「世界の人民の希望だった国際的共産主義の理想から極端に逸脱してしまつた現実のソ連をどう評価するか、というような難問」に彼らは同時に直面していた。この「難問」は、「現実のソ連」がその狂暴の力によつて人びとを押しつぶしかからぬ「全体」でないどころか、逆にまさにその狂暴の力によつて人びとを押しつぶしかかる「全体」だったという事態につけ加えて、その「ミニ版」としてあつて来た日本共産党をそれこそ「どう評価するか」の問題にかかわりあつて、二重、三重の「難問」になつた。私は、この二重、三重の「難問」に明快な答をあたえたのは植谷雄高だつたと思う。「革命」は「革命家」が死ぬことによつてのみ完結するといふ彼の革命認識は、「スターリニズム対反スターリニズム」の図式による「難問」への解答の域を大きく越えていた。植谷の認識は、「革命」を否定したのではなかつた。より高次なところで変革を志向しようとしていた。植谷の認識をもつことで、「戦後文学」は「難問」に対する基本の立場を定めたと言えるにちがいない。

しかし、今、現在、「難問」は、「東西」冷戦構造の崩壊に始まつての当のソビエトをふくめての社

会主義諸国の消滅とともに消えた。しかし、それは私たちがそのなかに住み、生きる「全体」が、その狂暴の力によって人間が押しつぶされることのない、人間が押しつぶすことのない「全体」になつたことではない。そして、今まさにそのままのかたちで「全体」は大きくゆらぎ、崩壊しようとして来ている。では、どうするか。ここで話はまた同じさっきの設問に戻るのだが、答は、もちろん、新しい「全体」をこれからつくり出すほかはない、だ。そうに決まっている。しかし、それをいかに、またいかなる原理に基づいてかたちづくるか。

晩年の野間はその「全体」の活路をまず環境の問題、そこでの根本的解決に見定めていたように見える。地球全体にわたつての環境破壊が彼自身をふくむ人間の努力によつてとまり、人間の住む、いや、動植物もそこで生きる地球全体の環境が根本的に改善されることがあつてはじめて、新しい「全体」はかたちづくられ得る。晩年の彼は基本のところ、その方向めざして考え、書き、書いていた。彼の未完の大作『生々死々』はまさにその方向を志向した「文学」としてある。

晩年に至つて、長年秘めて来た決意を突然口に出すようにして「私は『戦後派』として生涯を全うし、死に至るつもりである」(さきの引用とともに「私の死生観」から。『全ての人は過ぎて行く』新潮社・所収)と書いた中村が、彼の未完作『老木に花の』のなかで力を込めて書いていたことのひとつは、老人の「性」に象徴される暴力をとまわらない男女の平等、対等な性関係、さらにそこに象徴されるその狂暴の力が人びとを押しつぶしにかかることのない「全体」だった。

三人の作家のなかでもっともおくれて、もっとも最近に亡くなった堀田は、遺著『空の空なればこそ』を見れば、「全体」をもっと大きく二十世紀の世界全体の問題としてとらえていたように見え

る。その遺著のなかの「極端なる世紀」と題した一章で、彼は、彼の訳名で言えば、『極端なる時代、短かかりし二十世紀』というイギリスの史家の著書から引用して、「私はこの二十世紀を西欧の歴史のなかでも、最も怖るべき世紀として回顧するのみである」、「私は二十世紀を虐殺と戦争の世紀として見るのみ」、「二十世紀は人間の歴史のなかでも、最も兇暴な世紀であつたと考えないわけにはいかない」、「二十世紀を要約するとすれば、この世紀は人間によつてかつて考えられた最大の希望を奮い起させ、そしてすべての構想 (vision) と理性を破壊してしまつた世紀であつた」等々の哲学者、農業学者、作家、音楽家などのヨーロッパ知識人の発言を列挙したあと、さらに「米騒動、シベリア出兵、五歳の時の関東大震災」から「朝鮮戦争、ヴェトナム戦争、高度成長、そして現今のバブル崩壊」に至る自分の「短かかりし二十世紀」を考察して、自分もまた「『二十世紀は人間の歴史のなかでも、最も兇暴な世紀であつた』と考えるざるをえない」と結論づけるのだが、そして、さらに「『すべての構想と理性』は破壊されてしまつたのであろうか」とつけ加えて書くのだが、もうひと言、さらに「たとえそうであつたとしても、責任ある個人というものだけは絶対に残つていたのであつたから、再出発は可能である、と私は思つている」とつづけていた。

この彼のおしまいのことばは自信と希望に満ちたことばだ。そして、このことばは、私がそれぞれの告別式でそれぞれの「死顔」に対面した私の「先達」にして「同志」の三人の作家を代表しての「遺言」であるように、私は今あらためて思う。

2 責任と自由——「書き砕く」こととしての「戦後文学」

一

はじめに、まず、ことわっておきたい。私は、ここで、すでに書き手の作家が大半物故してしまった「戦後文学」を「戦後文学」論として書こうとしているのではない。「戦後文学」論はこれまでによく書かれて来たし、これからもっと書かれるべきだが、私が今しようとしていることは、「戦後文学」を足がかりにして、今、現在のことを考え、書くことだ。今、現在のことには、今、現在の日本のこと、世界のこととあれば、今、現在、生きて、書いている私自身のこと、私自身の文学のこともある。今、現在のことを考える足がかりになるものは「戦後文学」だけではないが、「戦後文学」がひとつのたしかな足がかりであることはたしかだ。

私は「戦後文学」の研究者ではないし（私は「戦後文学」の主要な作品ともくされているものもすべては読んでいない。また、読みかけて途中でやめたのもいくつもある。現にこの文章を書くことで読み出して、何んだこんなものだったのかと投げ出してしまったものもある。これには、私が年をとって来ていることがかかわっているにちがいない。若書きは読めない）、私は「戦後文学」のねえからの心酔者でもない（私は野間宏の『青年の環』はみごとに作品だと思いが、谷崎潤一郎の『細雪』も『猫と庄造と二人のおんな』もみごとだと考えている。好みから言えば、『青年の環』よりむしろ

谷崎の二作だ)。私はまた、よく誤解されることだが、「戦後文学」の継承者ではないし、また、そうあろうと志しているのでもない。あたりまえのことだが、「戦後文学」は「戦後文学」、私は私だ。ただ、「戦後文学」の作家たちの多くが追究した問題には、私が今、現在、追究し、考え、書く問題と重なるものがある。その意味で、彼らは私の「先達」として今、現在も、奇妙な言い方になるかも知れないが、すんではいいない。私のまえにいる。

一一

「戦後文学」の範囲をどう定めるかについて、私は研究者ではないので子細に論じるつもりはない。私は出たことがないので実際にどんなことをしていたのかまったく知らないが、「あさつて会」とかいう名の「戦後文学」の作家の集まりがあったという話は聞き知っている。天成の「司会者」としてあった(とは、中村真一郎がどこかで書いていたことだ) 埴谷雄高をはじめとして、あと、武田泰淳、野間宏、中村真一郎、堀田善衛、椎名麟三、梅崎春生がその「会員」だったらしいが、彼らを中心として「戦後文学」はあったと見て、大きなまちがいはないだろう。もちろん、あと何人も作家をつけ加えて行くことはできる。たとえば、大岡昇平。彼は彼自身が、手もとに今その本がないのでたしかめられないが、埴谷との対談のなかで、自分はもともと「戦後文学」の側に来るべきだったのに、はじめはちがうところに行ってしまったと話していた。

「戦後文学」の作家たちは、みんなそれぞれにちがっていた。世代的には似たようなものだったが(それでも年齢の差で言えば、今述べた大岡を入れての八人においても、一九〇九年生まれの大岡、一九

一〇年生生まれの埴谷と一九一八年生まれの中村、堀田のあいだには十歳近い開きがある、資質、思想、経歴、体験、そして、これが作家としてもつともかんじんなことだが、彼らがつくり出した文学はそれぞれ大きくちがつっていた。第一、彼らはひとつの共通した主義主張をもつて文学運動をかたちづくって、あるいは、かたちづくろうとして作品を書いたのではない。彼らはそれぞれに自分の作品を書き、書かれた作品もそれぞれに大きくちがつっていた。しかし、同時に、そこに共通するものがあつた。その共通するものがあつて、彼らの文学は全体として「戦後文学」と総称され得るものになつた。私は「戦後文学」をそう認識するが、その認識は見当外れではない。

三

共通するもののひとつは、彼らの文学がそれぞれに「戦争」、それも「日本の戦争を通過した文学」だつたことだ。

「日本の戦争を通過した文学」とは奇妙な言い方だが、これは野間宏が、白井吉見の「日本共産党の中の二十年」と題した彼に対するインタビューのなかで使つていたことばだ。野間によれば、彼が「戦後文学」の作家として戦後まもなく日本の文学の世界に登場して来るのと同じころに入党し、そして、そのあと二十年後には離党した（たしか彼は「除名」された）日本共産党幹部のえらいさん方には、宮本百合子のような文学者をふくめて、彼の小説は理解できなかつたのだが、それは野間の小説が「日本の戦争を通過した文学」であつたからだ。そう野間は言い、あとを次のようにつづける。

「とくに『崩解感覚』というあれは決定的。もうあそこまで行つたらいかんと……。その前までは許

せたけれども。あそこで決定的になったですね。戦争と戦闘のなかで人間関係一切が切断されるとい
う、強い、ぬぐい難い印象をうち込まれて、戦場から帰ってきています。このくずれ去った人間を明
らかにして、その上でなければ連帯など成立しないと考えてきている。そこでその打ちくだかれ、ま
たつながりを切断された人間をこまかく見つけつけてゆこうとしてその方法をさぐっていたのですが、
『崩解感覚』はそのようなところに出てきた作品です。」「(展望)一九六五年四月号)

この野間のことばは、臼井の「野間さんの場合、ことばで言ってしまうと軽くなっちゃうけれども、
人間不信というのか、人間連帯ということが……戦争体験なりなんなりを通じて、相当強くあつたわ
けでしょう。そのところが、さっきの人たちにすなおにわからんところじゃなかったのかな」とい
う感想を受けてのことばだが(「さっきの人たち」は、党幹部のえらいさん方のことだ)、野間には、「戦
争と戦闘のなかで人間関係一切が切断される」と注意深く「戦争と戦闘」の二語を使って自分のその「人
間関係一切の切断」体験を話していたことが示すように、一般的な戦争体験とともに、フィリピンの
バターン半島攻略戦での戦闘体験があつた。彼はそこに初年兵という日本の軍隊機構のなかでの最下
層の兵士として参加していた。いや、参加させられていた。バターン半島攻略戦はまだまだ勝ちいく
さだった「太平洋戦争」の初期の段階において、そのあとの負けいくさのなかでいやが上にも露呈さ
れる「日本の戦争」の本質と、その戦争を行なう日本の軍隊の途方もない前近代性とそれとともに存
在する度しがたい野蛮をすでに十分にさらけ出した戦闘だった。圧倒的に強大な火力をもつ米軍に対
して、自軍の火力の劣勢を補なおうとしてくり返される日露戦争当時と変らぬ肉弾攻撃。補給の軽視、
無策。「バターン死の行進」に端的に示された残虐行為。そして、ピンタに始まる種々雑多な「私刑」

によつて暴力的に秩序を形成、維持されて来た非人間的組織としての軍隊（野間は、自らのバターン攻略戦での戦闘体験を土台にした『顔の中の赤い月』のなかで、初年兵北山年夫の戦闘体験を「それは初年兵の彼にとつては敵に対する闘いではなかった。それは日本兵に対する闘いであつた」と書いていた。「味方の敵兵である四年兵、五年兵にしばかれながら」北山は必死に重い砲車を曳き、同じ作業を四年兵、五年兵にしばかれながらやつて来ていた同じ初年兵の「戦友」が疲労のあげく脱落する——それは、つまり、死だ——のを助けることなく見捨てる）。これらすべてのことのなかで、兵士はたたかい、殺し、殺される。あるいは、「戦友」を見捨てる。こうした戦闘体験から、「人間関係一切の切斷」が生まれて来てふしぎはない。逆に生まれて来ないのがふしぎだ。

この全体が「日本の戦争」の本質をかたちづくつた。そして、この全体の頂点に「天皇」が立つていた。また、「天皇」が逆に土台から全体をまるごと覆いつくしてもいた。

全体の頂点に「天皇」が立つていたとは（「天皇」と引用符つきで書くのは、「昭和」天皇の「アジア・太平洋戦争」のみならず、「明治」天皇の行なつた日清戦争も日露戦争も同じ本質をもつていたからだ）、日本国家の最高位の統治者、権力者の決意、命令、あるいは、思惑がなければ、「日本の戦争」が始まらなかつたからだけではない。その日本国家に属する日本国民は、すべて「陛下の意のままに動き、生命をも捧げる」のを最高の美德とした論理、倫理を当然の前提として生きていたからだ。この論理、倫理はべつに法律として国民を縛りつけていたのではない。そんなことが必要でないほど、それは当然の前提であり、日本国民の日本国民としての不文律の要件だつた。この要件に反すれば、つまり、彼女はそれだけで非国民だ。

そして、「天皇」がまるごと「日本の戦争」の全体を土台から覆いつくしていたと私が言うのは、「日本の戦争」を行なう「日本の軍隊」のなかで、たとえば、四年兵、五年兵のピンタまでが「天皇」の権威の下に行なわれていたからだ。権威の根拠は、四年兵、五年兵の「日本の軍隊」のなかの位置が「日本の軍隊」全体の頂点に立つ「大元帥陛下」としての「天皇」に、当時の軍隊用語を使って言えば、それこそメンコの数だけ初年兵の上位に立つことで近かつたことにある。「日本の軍隊」は、その由来、来歴をなかなかの名文で記した一八八二年（明治一五年）の「軍人勅諭」（陸海軍人に賜はりたる勅諭）も、そのお手軽、官僚化版の一九四一年（昭和一六年）の「戦陣訓」も説くようにもともとが「天皇」を護るためのココウの臣の集団としてかたちづくられた軍隊なのだ（考えてみれば、これは「天皇」の「私兵」だ。国家、まして国民の軍隊ではない）。当然、「天皇」の位置の遠近がここでは重要な決め手になる。つまり、四年兵、五年兵は初年兵を殴ってよろしい、殴れ。殴って、ココウの臣をいやが上にも鍛え上げろ。

これらすべてがあつての「日本の戦争」、「日本の軍隊」だった。それは、つまり、二つはそれぞれに「天皇の戦争」、「天皇の軍隊」——「皇軍」であつたことだ。

初年兵北山年夫をしばく四年兵、五年兵は「天皇」のココウの臣として彼をしばっていただろうが、北山自身はどうだったのか。ココウの臣としてしばかれていたのか。いや、自分の戦闘体験を北山に仮託したにちがいない初年兵野間はココウの臣としてしばかれていたのか。そうでなかったとしたら、彼はそのとき何んだつたのだろう。おそらく、これは彼自身の自問だった。彼は終生その自問にむきあつていたように見える。

四

そして、この「日本の戦争」「天皇の戦争」は、侵略戦争だった。侵略戦争の定義を、あれこれンサクしてここで書くつもりは私にはない。他人の家に無断で、あるいは、手前勝手な理屈をつけて力づくで土足で入り込み、さからうその家の主人は殴り倒し、いや、殺してまで言うことをきかせ、あとそこに居すわって財産を奪いつづける——というのが私の「侵略」のとりあえずの定義だが、この定義は基本のところでもまちがっていないにちがいない。「明治革命」（私は「明治維新」ということばを使わない。当時の後進国、「第三世界」革命という意味で「明治革命」と言う。この「明治革命」に現代でもつとも似ているのはナセルの「エジプト革命」だろう）以来日本国家が「皇軍」を使ってやって来た「日本の戦争」「天皇の戦争」は、すべて、そこにどのような名目、大義名分がつけられようが、私のとりあえずの定義に外れることのない侵略、植民地獲得のための戦争だった。「皇軍」は、理屈はどうであれ、「侵略軍」だ。

この「侵略軍」のなかで、初年兵北山、いや、初年兵野間の立場は二重三重に苦しいものになる。侵略戦争を当時の大義名分に従って、「東洋平和」樹立のための、あるいは、「大東亜共栄圏」実現をめざしての「聖戦」だと信じられれば（「東洋平和」樹立は「支那事変」のころの大義名分、「大東亜共栄圏」実現は、戦争が「支那事変」から「大東亜戦争」に拡大して行ったころの大義名分だが、この二つの大義名分が、他の、たとえば、「満蒙は日本の生命線だ」というような大義名分よりより普遍性をもっていて通りのよいものだったように思う。私自身、まだ幼なかつたが、この二つの大義名

分のことはつきり憶えているところを見ると、私の心をとらえたにちがいない)、問題はなかっただろうが、北山には、まして野間には、自分が兵士として参加させられる戦争がとうていその大義名分の下の「聖戦」と信じられるはずはなかった。いや、北山については知らないが、野間については、彼が書き記していることで明瞭なことだが、すでにマルクス主義者だった野間はあきらかに日本がこの戦争——侵略戦争で敗れることを信じ、また望んでいた。

ここで彼の立場はまさに困難なことになる。私がここでただちに想起するのは、日本海海戦を敗北したロシア艦隊の側から書いた小説、プリボイの『ツシマ——バルチック艦隊の壊滅』のことだ。プリボイ自身が水兵としてこの海戦に参加したのだが、この艦隊には、すでに革命活動家たちが乗っていた。そのひとりとプリボイは知己になるのだが、自室のツアーの肖像画の裏にマルクスの肖像画を隠している活動家は、彼の革命的敗北主義の信念を語り、革命が成功して新しいロシアが生まれるためにはロシアが敗れなければならない、この自分たちの艦隊は敗北しなければならない、と力強く説いたあと、しかし、それはこの自分の艦が沈んで自分が死ななければならないことだと悲痛な表情でつづけたとプリボイは『ツシマ』のなかで書いていた。野間も、私は今そのくだりが彼のどの小説のどの部分にあつたのか忘れてしまっているのせう。憶えの記憶でしか言えないのだが、自分は日本の敗北を信じているし、それはあるべきことだと願っているが、日本帝国主義の消滅は自分たちの肉体的消滅をとらなつて起こることではないか、そう考えると恐怖を憶えると友人と話し合っている場面を書いていたように記憶する。

もうひとつ、困難があつた。それは野間がいかに日本の敗北を信じ、日本帝国主義の消滅を願つて

いたにしても、彼が軍服を着て兵士として「日本の軍隊」のなかにいる以上は、彼もまぎれもなく「侵略軍」の一員としてあることだ。私はベトナム戦争反対の運動を始めたところに、それまでの平和運動には被害者の視点だけに基づいて運動が展開されていて、日本がかつて侵略戦争を行なった加害者であつた、それに日本人のひとりひとりが加担していたのだという加害者の自己認識がまったく欠けていたのを問題にして、日本人は被害者であるとともに加害者である、それも被害者であるにもかかわらず加害者になる、のではなく、まさに被害者であるからこそ加害者になるのだ、私たち日本人のその「被害者⇨加害者」のありようを平和の問題を考えるときの根にすえるべきだと書いたことがある（『平和の倫理と論理』⇨「展望」一九六六年八月号、『難死』の思想）〔岩波同時代ライブラリー・一九九一年〕所収）。その私の主張はそのあと人びとのあいだに大きくひろがつて、それは今は当然の認識となつて来ているようだが、野間の場合の「日本の戦争」、「侵略戦争」への「加担」はまさにそうした苦渋に満ちたものとしてあつたにちがいない。その過去の体験は彼にとつて重いものだっただろう。

五

そしてまた、「天皇の戦争」でもあれば「侵略戦争」でもあつた「日本の戦争」は、徹底した敗戦に終つた戦争だつた。ここで大岡昇平の戦闘体験のことを考えておきたいのは、野間の戦闘体験がまだまだ勝ちいくさだつたころの戦闘体験だつたのに対して、彼の戦闘体験は日本の敗戦がすでに決定的になつたころの同じフィリピンの戦場での戦闘体験だつたからだ。

大岡には、日本の敗戦は明瞭に見えていた。彼の敗戦、「日本の戦争」、そして、自分自身に対する

態度は、『俘虜記』の次の一節によく示されている。「私は既に日本の勝利を信じていなかった。私は祖国をこんな絶望的な戦に引きずりこんだ軍部を憎んでいたが、私がこれまで彼等を阻止すべく何事も賭さなかつた以上、今更彼等によつて与えられた運命に抗議する権利はないと思われた。一介の無力な市民と、一国の暴力を行使する組織とを対等に置くこつた考え方に私は滑稽を感じたが、今無意味な死に駆り出されて行く自己の愚劣を笑わないためにも、そう考える必要があつたのである。」

すでに「日本の戦争」を遂行する「日本の軍隊」は解体し始めていた。「ビンタ」などの「私刑」の暴力によつて形成、維持されて来た秩序、規律も崩壊し始めていた。それはそれだけ「日本の軍隊」が「天皇の軍隊」でなくなつて来ていたことでもある。ことばをかえて言えば、四年兵、五年兵が初年兵を殴る論理的、倫理的根拠がなくなつて来ていたことだ。大岡が配属された小隊は、大岡同様の補充兵が兵士のすべてであるという小隊で、その事実だけで「日本の軍隊」の解体を示していた。彼には、彼を殴り、しばく四年兵、五年兵という「味方の敵」はいなかつた。しかし、米兵というほんとうの敵がいた。ほんとうの敵は、今やひとりきりになつて山中をさまよう病兵の大岡のまゝに突然姿を現わした。

大岡がこの若い米兵（二十歳位の丈の高い若い米兵」と、大岡は書いていた）を射とうとして射たなかつた経緯についての『俘虜記』のなかのあまりにも有名なくだりを、私はここでくり返そうと思わない。ただひとつ述べておきたいのは、彼が射たなかつたひとつの大きな理由は、彼がそのとき彼の属していた「日本の軍隊」がすでに解体してひとりであったからだ。彼は『俘虜記』のなかで自分で分析してから、「戦争とは集団をもつてする暴力行為であり、各人の行為は集団の意識によつ

て制約乃至鼓舞される。もしこの時僚友が一人でも隣にいたら、私は私自身の生命の如何に拘らず、猶予なく射つていたろう」。ひとりになった彼は「この時既に兵士でなかった」。殺すことを彼は嫌悪した。「この嫌悪は平和時の感覺」だった。彼は射たなかった。

敗戦を彼は米軍の俘虜收容所で迎える。八月十五日のことではない。八月十日夜、收容所の内外で突然おこった騒ぎで、それは日本政府がポツダム宣言受諾を、いや、正確にはその用意ありとアメリカ合州国側に通告したことが知られたことからおこった騒ぎだったのだが、大岡は他の俘虜とともにその「祖国」の一大事を知った。私が今唐突に「祖国」というようなあらたまった言い方をするのは、大岡が『俘虜記』のなかでそのことばを使ってその夜のことを書いていたからだ。まず、彼は泣いた。「涙が自然に頬に伝うに任せた。」そう書いたあとを彼はつづける。「では祖国は敗けてしまったのだ。偉大であった明治の先人達の仕事を、三代目が台無しにしてしまったのである。歴史に暗い私は文化の繁栄は国家のそれに随伴すると思っている。あの狂人共がもういない日本ではすべてが合理的に、望めれば民主的に行われるだろうが、我々は何事につけ、小さく小さくなるであろう。偉大、豪壮、崇高等の形容詞は我々とは縁がなくなるであろう。私は人生の道の半ばで祖国の滅亡に遇わなければならない身の不幸をしみじみと感じた。国を出る時私は死を覚悟し、敗けた日本はどうせ生き永らえるに値しないと思っていた。しかし私は今虜囚として生を得、その日本に生きねばならぬ。」

しかし、この涙と感慨のあと、彼をおどろかせたのは、まったく別種の情景だった。彼はひとりであるのに耐えられなくて、「小隊小屋の一つに入って行つた。小屋は静まり反つていた。奥行十間ばかり、両側に並んだベッドに俘虜はただ長々と横たわり、黙って天井を見凝めていた。その時彼等の

考えていたことは、それぞれ異なるであろうし、無論一傍観者の推測を超えている。しかし私はほぼ彼等が何も考えていなかったと信じている。例えば私は彼等の中で泣いた者が、極く少数の感傷家にすぎなかったのを知っている。しかもそれさえ俘虜だからこそ泣く余裕があったというだけの話である。日本降伏一時間後の、これら旧日本兵士の状態は要するに無関心の一語に尽きる。『祖国』も『偉大』もこの黙つて横たわつた人々の群に比べれば、幻想にすぎない。」

私が長く『俘虜記』のこのくだりを引用したのは、私自身の「日本降伏」をラジオ放送によつて知つたあとのことを考えるからだ。私はそのとき十三歳、中学一年生だったが、大岡が見たその俘虜たちと私はまったくよく似ていた。私は泣かなかつた。涙が「自然に頬に伝う」ことはなかつた。そして、たいへんなことになつたなとは思つたが、それ以上のことは何も考えていなかった。よりそのときの事実在即して言えば、私は何を、どう考えていいのか判らなかつた。私はただ杳然としていた。「祖国」も「偉大」もコンリンザイ私の頭のなかになかつた。

六

しかし、八月十日に大岡たちが知つた「日本降伏」は「ポツダム宣言受諾の用意あり」で、正式の降伏ではなかつた。日本政府は受諾に、ひとつ、条件をつけていた。大岡自身のことばを借りて書いておこう。「私は『星条旗』（謄写版刷の速報誌）により日本の条件が国体護持であることを知つて失笑を禁じ得なかつた。名目をどう整えようと、結局何等かの形で、敗者が勝者の意のままにならねばならぬのは同じである。」

そのあと、大岡は「正式降伏」に至るまでの事態の経緯を『俘虜記』のなかで子細に書き記している。それはそれだけ彼の関心、いや、憂慮がそこにあつたからにちがいない。まず、書いておきたいことは、彼がすでに八月十二日には、「天皇の権限が聯合國最高司令官の制限の下におかれるという条件つき」ではあつても、「国体が護持され」、それが「伝えられた」ことを收容所のなかで知っていたことだ（もちろん、日本では「国体護持」を「正式降伏」の条件につけた天皇以下の日本政府のえらいさん方の当事者を除いて、誰も知らなかつた）。大岡は『俘虜記』のなかでそう書き記したあとを、「今度は日本政府の寛大を待つ番になつたが、私は結局軍人共がこれを容れることを信じていた。現実はそのを強制している」とつづけている。

しかし、大岡が期待したように、日本政府は「寛大」ではなかつた。「軍人共」は、敗戦の側にはすべてが「強制」される冷厳な「現実」を理解する能力はなかつたし、「容れる」余裕もなかつた。そのあと十三日以下の事態の推移を大岡は次のように書いている。

「十三日の『星条旗』は日本の（「正式降伏」の）回答の未着を同じ焦躁をもつて報じていた。（收容所の米軍係官の）ウエンディの質問に対し、私は日本の戦争犯罪人が自己の生命と面子^{メンツ}のために、天皇を口実に抵抗しているのだらうと答えておいた。十四日の報道はさらに悪かつた。『星条旗』の調子には威嚇が籠つて来た。満洲で依然ソヴィエト軍が日本軍を砲撃していること、ニミッツの艦載機が『日本の決意を促がす』ために、各都市の爆撃を続けていることを報じていた。私は憤慨してしまつた。名目上の国体のために、満洲で無意味に死なねばならぬ兵士と、本国で無意味に家を焼かれる同胞のために焦立つたのは、再び私の生物学的感情であつた。」「天皇制の経済的基礎とか、人間天皇の

笑顔とかいう高遠な問題は私にはわからないが、俘虜の生物学的感情から推せば、八月十一日から十四日まで四日間に、無意味に死んだ人達の霊にかけても、天皇の存在は有害である。」

大岡のことばをまたまた長く引用したのは、ここで私はまたふたたび私自身のことを考えるからだ。そして、こうした大岡のことばを書きうつしながら少し手が震える気がして来るのは、八月十四日午後、天皇の「玉音放送」と称せられた録音放送が「正式降伏」を私たち日本国民、いや、彼の「臣民」に告げる二十時間足らずのまえに、中学一年生、十三歳の私が当時住み、生きていた大阪がそれまでに大阪が数多く受けた空襲のなかで最大の規模のものだったと言われる爆撃を受けていたからである。八月十四日午後その米軍による爆撃は「ニミッツの艦載機」によるものではなく巨大なB 29爆撃機数百機の主として一トン爆弾投下の爆撃だったが、目的は大岡が書いていたように日本政府の「正式降伏」への「決意を促がす」「威嚇」だった。その「威嚇」爆撃のなか、多くの市民がまったく「無意味に死んだ」が、ただここでひとつ言っておきたいのは、彼らが「無意味に死んだ」のは、大岡が収容所のなかで想像していたように、彼らが死んだ、いや、殺されたあと二十時間足らずのあいだに天皇が「正式降伏」を告げていたからではないことだ。「正式降伏」は彼らが無意味に一トン爆弾によって殺されたときには、もうすでに決まっていた。

「威嚇」爆撃のあいだ、私は家族総がかりで庭先に掘ったお粗末な——お粗末きわまる防空壕に身をひそめて爆撃の恐怖に耐えていたが、そうしているよりほかになかったが、ようやく空襲が終って外に出た私が拾ったのは、「お国の政府は降伏して、戦争は終わりました」うんぬんの文面のビラだった。ビラはB 29爆撃機が一トン爆弾とともに上空から撒いたものだが、ここでひとつ明瞭になることは、

その「威嚇」爆撃での死者の死が大岡の言う「無意味な死」よりもさらに「無意味な死」であったことだ（私は、後年、彼らの死のことを焦点に定めて、「無意味な死の意味」と題した評論を書いた）。もうひとつつけ加えておけば、私が両親とともに粗末きわまる庭先の手掘りの防空壕のなかで息をひそめているあいだに、そこから二百メートルほど離れた地点に一トン爆弾が落下して、あたりの人家、人命はすべて吹き飛ばされ、そこには大穴が開いた。それは、そのとき、二百メートルほど落下地点が私たちの防空壕にむかつて動いていたなら、私も私の両親も、大岡のことばの最後にある「八月十一日から十四日まで四日間に、無意味に死んだ人達」のひとりになちがなくなっていた。私は運よく生きのびたが、大岡と同じように「無意味に死んだ人達の霊にかけても、天皇の存在は有害である」との信念の持ち主になって今日まで生きているのは、その八月十四日の体験があったからだ。

七

しかし、こう書いて来て、つくづく奇妙なことだとあらためて考える。大阪の空襲の現場とフィリピンの俘虜収容所という数千キロ離れた場所にいた私と大岡が、その八月十四日においてつながっていたことが、だ。私はそのとき大岡のことを知らないし、大岡も私を知らない。しかし、二人の年齢も二十歳ほど離れた日本人、後年の二人の仕事にかかわって言えば、日本の作家はつながっていた。つながりをかたちづくったのは、「日本の戦争」「天皇の戦争」「侵略戦争」であり、その敗戦であり、それにもかかわらず「正式降伏」がなされないままに行なわれた米軍の「威嚇」のための爆撃であり、その無意味な殺戮であり、これらすべてのことの土台にあった「有害な存在」としての天皇。――

『俘虜記』は大岡が戦後の日本で最初に本格的にものにした文学——大岡の「戦後文学」だった。私
がものを書き出したのは、もちろんそれよりもつとあとのことだが、私のものの考え方、感じ方の底
には、その私の八月十四日の「戦闘体験」がある（武器の火力によって人間が生き死にの問題に直接
にさらされるという意味において、爆撃、空襲も「戦闘体験」だ。それも、爆撃、空襲される側が反
撃の手段をまるつきり持たない、一方的な殺戮としてある「戦闘体験」だ）。八月十四日の体験を直
接書く、書かないにせよ、それは私の文学に影を落としている。その意味で、私の文学と大岡の「戦
後文学」はつながっている。

大岡は『俘虜記』のなかで、大阪で私が上空から一トン爆弾とともに撒かれたビラによつて「お国
の政府が降伏した」ことを知った八月十四日の夜、彼のいたフィリピンの収容所で、日本の「ポツダ
ム宣言受諾」を「戦勝を告げるような調子で」触れまわった仲間の俘虜がいたことを書き記してい
た。しかし、そのあとを「俘虜の反応は皆無であった」とつづけている。それもそのはずだろう。「我々にとつ
て日本降伏の日附は八月十五日ではなく、八月十日であった。」

私にとつても「日本降伏」——「終戦」の日付は八月十五日ではなく、八月十四日だった。それも
一方的殺戮のなかの無意味な死をあまたともなつての「日本降伏」であり「終戦」だった。八月十
五日正午の天皇の「玉音放送」を聞いたあと（「玉音放送」そのものは、私の家の古びたラジオでは、
天皇特有のかん高い「玉音」が切れ切れに聞こえて来るだけで、何を言っているのかよく判らなかつ
た。「玉音放送」のあと私はすぐ外へ出て、そのころ家のまえに設置されていた町内会の拡声器でア
ナウンサーがしゃべる解説めいた放送を聞いた。アナウンサーは「敗けた」とも「降伏した」とも言

わなかった。ただ、「鉄は鍛えられてこそ強くなる」という意味のことを口にした。それだけで、私には日本が前日のビラが告げていたようにまちがいに降伏したのだと判った)、私は前日の爆撃の主要目標だった造兵廠へ出かけた(私の家はそこからさして遠くないところにあつた。だから、一トン爆弾のとぼつちりが近くに落下した。造兵廠はかつて「東洋一」と言われた大兵器工場で、その日までほとんど無傷で取り残されていた。工場破壊が目的だったから、投下された爆弾はほとんどが当時原爆を除けば最大の破壊力と殺戮力をもった一トン爆弾だった)。苦心の末たどり着いた「東洋一」の大兵器工場は完全に壊滅していたが、それは無意味な死の犠牲者の死体がいくつもそこにあつたことだ。私は死体見物に出かけたのではない。私は焼跡でいくらかでも黒焦げの、まるで巨大な虫ケラの死体を思わせる死体に出会っていたから、そんなものはもう見たくもなかった。しかし、そこでもそれは見えた。私は見た。

それが私の八月十五日——私の「戦後日本」が始まった日だ。大岡はフィリピンで同じ日をむかえたことになるが、『俘虜記』のその日についてのくだりの最後は、俘虜のひとりが大岡を通じて米軍の係官に言ってくれと頼むとのことばだ。「あたしもこれから家へ帰って、静かに女房子供と暮します」。しかし、日本では多くの女房子供も無意味にあまた死んでいた。いや殺されていた。

八

「戦闘体験」だけが「戦争体験」であつたわけではない。戦争は「銃後」をふくんで(もつとももう

たいして「銃後」はなかった。私はまぎれもない「銃後」の、そのはずの大阪で、まぎれもない「戦闘体験」をもった)、もつと大きく広いものだ。「戦闘体験」をもたない「戦後文学」の作家たちも、さまざまな場所、さまざまなかたちで「戦争体験」をもった。

「群像」一九九二年一月号は「戦後から未来へ」と題した長さが六六頁にも及ぶ大きな座談会を載せている(本書「対話」篇4参照)。出席者は埴谷雄高、中村真一郎、佐々木基一、小田切秀雄、それに私の五人。私を除くと、すべて「戦後文学」の文学者と大きく言ってみなされていい人たちで、当時の編集長があとで言った「これは戦後派の最後の大座談会ですよ」ということばは私はまだよく憶えている。そうだったかも知れない。すでに私が「戦後文学」の中心だとしてその名前を書き記した「あさつて会」の作家について言っても、すでにそのときで、椎名、武田、梅崎、野間も姿を消していたし、そのときから今日までに小田切を除いて、その「大座談会」に出ていた「戦後文学」の作家も物故してしまっている。「大座談会」に出席していなかった堀田も、九八年九月、急逝してしまつた。

「大座談会」は、中村真一郎によつて次のように書かれた「(「戦後文学」の作家たちの)そのマルクス主義と宗教との絡まり合いの中で、年少の私や福永を『芸術派』であると規定したのは、集りの統率者であり、激烈な思想のぶつかり合いを絶妙な司会ふりによつて裁いた、宇宙的作家、埴谷雄高」(「私の死生観」)の司会によつて始まつた。冒頭、埴谷はまず「最初に、テーマ設定みたいなことをすると、ここでの戦後文学という言い方は幅を広くとつて、その書くものに戦争の影といったものが投げられているものすべてを指すことにします。つまり、戦争を過ごした子供、少年、青年、壮年が書いた或る癡痕を帯びた文学です」と前おきをおいて、中村真一郎を皮切りに全出席者に「戦争体験」を語る

せている。いや、そのまえに、「芸術派」中村について、埴谷は、『近代文学』の中の内ゲバに捲きこまれ」て、荒正人が中村一派を「軽井沢コミュニスト」と名づけ、「死の影というけれども、死の影に一番遠いところにいたのではないか」と言ったことを紹介したあと（周知の事実だろうが、中村が「戦後文学」の作家として登場したのは彼の小説『死の影の下に』によつてだ）、しかし、最初は広島、長崎への原爆投下に至る日本の各都市への無差別爆撃によつて「死は必ずしも戦線ばかりではなくて、いわゆる銃後にもあつたから、死の形とか死に対する感じ方は実にいろいろあつたと思う」と彼の考えを述べて中村の発言をうながしている。この埴谷のうながしに、中村は、彼自身も銀座で空襲に遭つたり、列車に乗つていて機銃掃射を受けたりした体験を話したあと、自分の考える戦争における死は、知識人の孤立と疎外の果ての死だとなつづけていた。彼はすでにそうした孤立と疎外の体験を実際にもつて来ている。そうした孤立と疎外のなかで生きていた彼は、病弱だったので病死するか、頭上から爆弾が降つて来ておしまいになるか、そのどちらかになつて来ていて、とうてい日本が敗けるまで生きられると思つていなかった。もしうまく戦争が終るまで生きていても、そのときにはまちがいなく暴動が起こる。起これば、知識人の疎外現象は極端になつて、自分は「インテリ」と言うだけで殺される。戦争が終るといふことは死ぬことだ——と彼は言う。

これが中村の戦争体験だが、佐々木、小田切は、その「大座談会」での埴谷の言い方を使つて言えば、「社会主義思想あるいは共産主義思想を内部に抱懐している人」で、「普通の人と違つた戦争の中にいて、検拳されるということ」があつた。佐々木は埴谷のそのことばに応じて、自分はたしかに「昭和」一九九年には警察の留置場のなかにいた、空襲警報が鳴つても釈放してくれない、爆弾が落ちたらここ

で死ぬかと思つたが、ここにいる警察の看守どもも一蓮托生で死ぬ、ざまあ見ろという気持になつたと話したあと、釈放されたあとは病気で、東北の田舎で、中世のことを考えて暮らした、とつづけた。

小田切は「僕は戦争中、死と隣り合わせに暮らしていた」と話した。それは召集令状が来れば、それでおしまひだつたからだが、その死と同居したその日暮らしのなかで、同時に、「戦争のるつぽの中でのいろいろなものがこね合わされ、あるいはつつき出されてきた。戦争までの人間と文学は、いわばどんじりのところまで追い詰められてきて、自分自身についても、人間と文学についても意外な実体がさらけだされる」と小田切は言い、「戦後文学はこういうところをふまえて出てきた」とつづける。小田切によれば、「大正」の末以来「昭和」にかけて、一方にプロレタリア文学、他方に「近代派」の文学があつて、二つは対抗関係に立つてせめぎ合つていたが、二つとも今や追いつめられて、「まったくばらばらに、個人として自分の内面性の力、文学の力で闘う以外にないところに追いつめられていった。」小田切も佐々木もまだ若くて、ものを書き始めたころだつたが、「何らかの形で自我を執らし、なんらかの仕方での社会的な批判と打開に結びつけて行きたいと思ひながら、しかし実際には自分の孤独な内面性と文学との力でかろうじて時流に抗するところへ追い詰められていく。」

では、三人に順次話させた埴谷自身はどうしていたのか。三人のあとを、彼自身がしゃべつた、と言つて、積極的に語るに値する「戦争体験」があつたわけではなかつた。彼は、毎日、友人で戦前の「左翼」の新聞記者高野に状況を聞くために外務省の記者クラブに通つた。そのとき、彼は陸軍大臣官邸の前を通る。そのたびに、彼はのちになつて書いたことだが、『これを倒す力がこの国内にあるのではなく、私達を攻めてくる敵国の力のなかにしかそれが無いという鉛のつまつたような灰色の重苦し

さ』を何時も覚えた……」そうしゃべったあとを、埴谷はつづける。「先刻小田切君がいったように、僕のはまったく観念的な抵抗運動ですね。武田の『共犯者』や『死ナセナイ団』の洞察の素地もなく、ただ敗戦願望だけで動いていた。戦後、河上徹太郎が『配給された自由』といったけれども、これは戦争中、ほかに依存している僕や高野の精神の姿勢について当たっています。」埴谷には、敗戦の予測は十分についていなかったようだ。それは同じ「左翼」の佐々木も小田切も同じだった。佐々木は「応仁の乱の時代の人間は、その戦乱がいつやむかもわからないわけで、疎開していた僕も、山の中で畑でもつくって、自給自足でもするよりほかないかなアということまで考えたですね」と言い、小田切は小田切で、「戦争の終わりのころにはナチスの敗戦が間近いことが非常にはつきりしてきた。ただ、それでは日本がどういう形で敗戦になるか、という具体的な見通しが立たなかったから、自分に何がやれるかというところには行けませんでした」と当時の自分を語った。その小田切のことは受けて、埴谷は「本多秋五も、敗戦になったら、戦争は終わるものだと言ったというぐらいですから、かつての左翼も、見通しということでは非常にはつきりしない点があったわけですね」とまとめ上げる。「つまり、日本の敗戦も初めての経験でもあったし、その戦争の中で左翼であることも、どういうことが本当の左翼であるかも初めての経験なんです。」この正直な告白のあとを、埴谷はさらに次のようにつづけていた。「ある意味でいうと、外国のレジスタンスは、外国の歴史の中ですでに幾度も繰り返されていることなんです。」

つづきは製品版でお読みください。